

武道と禅

うそをついてはいけない 宏道会の剣道

米田 不動

1 稽古けいこがしたい 東京転勤と宏道会との出会い

私が平成14年7月1日付けで東京勤務を言い渡されたのは、その約2週間前の6月中旬でありました。当時、長女は4月に高校に入学したところであり、妻も仕事を持っていましたので単身赴任となりました。東京支店の人が何人か総武線沿線に住んでいたため市川でアパートを探し、江戸川の河川敷に程近い一室を借りることとなりました。

東京での単身生活で不便を感じることはありませんでしたが、当初認められていた月に一度の帰宅交通費もいつの間にやらなくなってしまい、週末を日当たりの悪い一室で過ごすことが多くなりました。

「剣道の稽古をしたい。」なんとなくそんな風に思うようになりました。近くで剣道場はないものかとイエローページをめくっていると、宏道会の囲みが目に入り電話をかけました。

2 これが剣道 怖い

防具を担いで門をくぐったそこにあったのは「真剣」でした。学生時代に経験していた剣道は、3尺9寸の竹刀を持ちどちらが先に有効

打突をとるかという競技でしたが、宏道会の稽古には3尺そこそこの竹刀を真剣として扱い、一度刀を持って構えた以上一步も下がる事が許されないやり取りがそこにはありました。

あるとき栗山令道さんに「米田さん、どうですか？」とたずねられ、「怖いです。」と答えると、笑顔ですかさず「怖くなければ剣道じゃないですよ。」と言っていました。

刀を振りかぶり振り下ろすのは後にも先にもただ一度きり、それが^{すべて}全てで、怖くなるのは当たり前のことでした。

3 まっすぐ立ち、まっすぐ踏み込み、まっすぐ振る

基本

宏道会の稽古は静坐、掃除、基本（素振り、送り足など）、切返し、かかり稽古、地稽古、形稽古とありますが、その全てがまっすぐ立ち、まっすぐ踏み込み、まっすぐ振るための稽古であるように思います。

稽古の終わりにいつも唱える『五戒』に【うそについてはいけない。怠けてはいけない。やりっぱなしにしてはいけない。わがままではいけない。ひとに迷惑をかけてはいけない。】とありますが、ひとつひとつの稽古が五戒そのものの実践となっているのです。ごまかしやうそは一切通用せず、もう全身でぶつかっていくしかないのです。

4 剣道と日常 自分に人に正直であること

「うそをつかず、正直に一振り」ここには勝った負けたはもともと存在せず、それは日常の土台そのものです。人間関係そのものと言ってよいと思います。

自分を飾らず投げ出すことは勇気のいることではありますが、そこから生まれる関係こそが本当の人間関係であり、世の中の体制が変わろうが不景気になろうが関係なく、思いやりに裏打ちされてずっと続

いていくものであると思います。

宏道会の剣道はまさしく生きる土台作りをする場として、私にとって一生の宝物であります。社会人として難問にぶち当たったとき、また何かをやろうと決めたとき、「うそだけは絶対につかない。」と肝に銘じることができました。

一緒に仕事をする人のことを考え、絶対に逃げない姿勢を貫くうちに、いつの間にやら周囲の人に支えられている自分に気付くことがあります。実際数年前、取引先の倒産で社内的に非常につらい状況に陥ったとき、多くの人に支えられ助けられました。また新しいことをしようとしたとき、「米ちゃんが言うんやったら、しゃーないな。一緒にやってみようか。」と言ってくれる人々もいてくれました。

5 これからのこと 自分に課すもの

平成18年7月に単身赴任を終え大阪に戻りましたが、上京して栗山のバス停から坂道を下って道場に向かうときがとても楽しく、うきうきしてしまいます。

稽古に来ている子供たちが大きくなり、いつの日か道場に向かう道のりが楽しく、うきうきするような瞬間を経験できるよう願わずにはおれません。

自分はまだ何もできませんが、引き続き稽古を積んで次の世代に宏道会の稽古を伝えていきたいと



稽古を終えて（著者）

思うのであります。伝えていければ、楽しみはもっともっと大きなものとなるでしょうし、それが一番大事なことではないかと思えます。

京都で生まれた『一本の樹』というフォークソングにこんなくだりがあります。

雨の日は雨の唄^{うた}を
晴れの日には晴れの唄を
唄いながら立ち尽くし
樹は空をめざす

合掌

著者プロフィール



米田不動（本名 / 岳史）

昭和34年、大阪府生まれ。神戸市外国語大学外国語学部卒業。現在、日本資材株式会社京都支店勤務。平成15年、人間禅附属宏道会入会。平成18年、人間禅丸川春潭老師に入門。